農と食の邂逅

姉妹で協力してのコメ作り スマート農業で目標や結果が見える化

株式会社 おしの農場
（山形県天童市）
専務取締役 押野 日菜子さん
押野 寧々さん

就農して農業が楽しくなった

父でもある代表取締役の押野和幸さん（62歳）や他の従業員とともに、135ヘクタールの圃場で、大型農機を難なく乗りこなす押野日菜子さん（27歳）と押野寧々さん（25歳）。今や2人は、女性活躍やスマート農業の先進法人としてシンポジウムの登壇者になるなどひっぱりだこだ。

稲作では今なお、機械作業は男性、補助作業は女性という役割分担があるが、おしの農場には当てはまらない。姉の日菜子さんは代かき、妹の寧々さんは田植機とコンバインを乗りこなす。寧々さんは小学校の卒業アルバムに「将来は農業経営者になる」と宣言し、農業高校時代から農機も乗りこなしたつわものだ。和幸さんも「娘たちは慎重に扱うので農機が壊れにくい」とお墨付きを与える。

サクランボなど果樹で有名な山形県天童市。押野家も周囲と同じく、果樹と稲作の複合経営だった。そんななか「機械化された土地利用型農業が自分に合っている」と、和幸さんは、果樹の生産や販売が忙しい農家から水田を預かり、規模拡大を断行。2018年に稲作専業の法人となった。

姉妹に就農の理由を聞くと口をそろえる。「子供のころから生活の場が田んぼであり、遊び場でもあった。自分には農業が向いている」と迷いはなかった。農機の扱いに慣れ

P17　姉の日菜子（左）さんは山形県立農林大学校（現東北農林専門職大学附属農林大学校）を卒業後、2019年におしの農場に入社。24年から専務取締役。主に代かき、収穫時にはライスセンターを管理する。妹の寧々さん（右）も同農林大学校を経て、21年に就農。田植えのほか、大豆の播種、収穫、調製を担当する。ともにドローンを操り、防除や追肥をおこなう
P18　「あなたの田んぼ、守ります」を経営理念に地域内の農地を積極的に預かっている。法人化した2018年から７年間で圃場面積は２倍に増え、地区内の農地の1/3を預かるまでになった（上段右）　農閑期を利用して海外旅行に出かけることもあるという日菜子さん（上段左）　大豆の収穫風景。面積は30haに及ぶ（中段）　寧々さんは2025年に結婚し、新たなスタートを切った（下段）（上段右と中段の写真提供：おしの農場）

ている寧々さんは、就農直後から機械作業に就いた。一方、寧々さんより2年早くに就農した日菜子さんは、1年目は苗運びやサクランボの剪定枝の片付けなど補助作業に専念したが、翌年から農機に乗って作業するようになった。「1年で20ヘクタールぐらい規模が一気に増えました。適期作業をするため、私も農機に乗ることに」。実は、日菜子さんは「乗用車の運転は不得手なほう」だそうだが、「田んぼではスピードが遅く、標識はなく、ストレスなく運転できます」。

寧々さんは「機械に乗っていると、高齢の方からじっと見られる時があります。でも、もう慣れました（笑）」。日菜子さんは「実際にやり始めてから仕事が楽しくなった。コメ作りが〝激変〟したことも関係があります」。〝激変〟とはスマート農業の普及だ。

学びを深めてスマート農業活用

農場では、GPS搭載の農業機械とクラウドを連携させ、圃場管理や作付け管理、作物の収量・食味のデータ分析をおこなうクボタの営農支援システム「KSAS」を活用している。圃場ごとの生育状況がわかる「ザルビオフィールドマネージャー」と同システムを連携させ、可変施肥対応田植機も導入済みだ。その他、ドローンや自動操舵トラクタも姉妹は使いこなす。

日菜子さんは「追肥などの作業が楽になったことと、目標や結果が見える化されたこと」とスマート農業の魅力について語る。おしの農場が栽培する主食用米の主力、つや姫には厳格な栽培基準があり、玄米のタンパク質含有率の目標値も設定されている。これまで収量はクリアしたがタンパク質含有率がやや高かった。そこで、圃場ごとの収量・食味のデータに基づき、タンパク質含有率の目標を定めたうえで、可変施肥対応の田植機で移植同時施肥にチャレンジした。見事に収量、タンパク質含有率とも目標値内に収まった。「ゴールを決めて近づけていく過程に、やりがいがあります」（日菜子さん）。

もっとも、機械さえあればスマート農業の成果を出せるとは思っていない。「スマート農機を活用するには自分たちがしっかり

勉強する必要がある」と語る。日菜子さんによると、田んぼの取水口近くは収量が低めになりがちだ。そこに肥料を多めに散布しても、水流の勢いによって肥料は流亡しやすい。散布量を増やすより、健苗を薄播きし、丈夫に育てるほうが効果的だと聞いた。さまざまな実証実験にかかわるおしの農場には、農機メーカーや県の農業担当が訪れ、情報提供されるため、学ぶ機会が多いそうだ。スマート農業を活用するには、基本知識の蓄積があってこそ――。姉妹は、時間を割いては研修会や勉強会に出て、得た情報を従業員と共有することを心掛けている。

組織としての体制づくりに着手

わかるまで学び、行動に移す精神は和幸さんゆずりなのだろう。現在、おしの農場は地区内の3分の1にあたるほどの担い手だ。地域農業を守り、かつ作業効率を上げるため、和幸さんはプロ農家が集う勉強会に積極的に出て、収量や品質を維持する技術と必要な機械化体系を整えた。スマート農業はこれらの延長線上にある。

一方、栽培技術はいたって基本に忠実だ。寧々さんが主に担当する大豆作では、山形県平均の2倍以上の単収を得た。「適期作業を心がけ、排水に問題がないか降雨後の田んぼの見回りを欠かさないぐらい」と寧々さんは言うが、まさに基本技術の徹底から最新技術まで使いこなす姿勢が評価され、2025年度農林水産祭の「農産・蚕糸部門」で天皇杯を授与された。

「よいものをたくさん作る」という考えは、姉妹に見事に受け継がれている。販売は卸や農協に一任し、直販や加工などは計画していない。それよりも、姉妹にとっての課題は「働きやすい職場環境をどうつくるか」だという。「家族経営の期間が長かったこともあり、あうんの呼吸で仕事をしてきました」と日菜子さん。今では家族以外の従業員のほうが多くなり、人材育成や労務管理を整備する必要性を感じている。すでに作業ごとのマニュアル作りに取りかかっている。これまではベテランが新入りに現場で教えるだけだった。日菜子さんは「ある作業のマニュアルを私なりに作ったところ、ベテラン従業員が別の作業マニュアルをみずから作ってきてくれた」と組織としての一体感に手応えも感じている。

3年後をめどに和幸さんは日菜子さんに経営を引き継ぐ計画だそうだ。「現場で作業するのがとにかく好き」という寧々さんは農場長候補。「誰もが言いたいことを言い合えるフラットな法人にしたい」と姉妹は意欲満々だ。

姉妹の母でもある取締役の由己さん（57歳）は、「地域の方は信頼してうちに田んぼを預けてくれている。その期待に応え続けていってくれたら。あまり無理せずに」と優しく気遣いする。この姉妹ならやっていくはずだ。地に足をつけて、正面から農業を楽しみ、そして挑み続ける姿勢は今後も変わることはないだろう。

（青山 浩子／文　藤井 大介／撮影）

圃場ごとの作業日誌はスマートフォンで都度確認しあう（上）
春一番におこなう作業。田んぼの状態により、スコップで土を掘り返し、分析する（下）